

〈論 説〉

意見文の推敲につなげる文話題構造分析を
活用した実践

—学生は段落がまとまらない問題をどう書き換えたのか—

西 谷 尚 徳

【キーワード】 学生、推敲、段落、意見文、文話題構造分析、アカデミック・ライティング教育

1. 問題意識

日本の初年次教育の実施率は、2001年には80.9%だったものの2019年には97.0%となった。文部科学省の調査（2021）によると、722大学のうち678大学の91.4%が「レポート・論文の書き方等の文章作法」を実施しているとのことである。初年次学生にレポート・論文の書き方を教える科目（以下、AW教育）は、各大学において「日本語表現」「文章表現」「アカデミック・ライティング」などで多様な内容の授業が展開されている。入学当初の学生がレポート・論文の書き方を学べるよう試行錯誤されるなか、その円滑な移行のために意見文の作成を扱うことが多いようである（坂東；2016、伊集院・高野；2020、井下；2019）。

意見文の作成では、ある課題に対して根拠を挙げて論証するための文章表現力が必要とされ、全体でまとまりのある文章を述べることが求められる。その構成は、「序論・本論・結論」で文章全体を組むことだけでなく、一つの段落において主張する内容を示す「中心文」と理由や根

拠を述べる複数の「支持文」、場合によっては最後に段落を総括するための「結論文」で締めくくることによって段落内をまとめる。そのために一つの段落がまとまりをなすように、文と文の意味がつながるように書く。学生に意見文を書かせることは、文脈に意味的なつながりをもたせたり、中心文・支持文・結論文のそれぞれの文の機能を理解させて書かせたりといった利点があると考えられる。こうした意見文の指導があることによって、学生が段落の内容のまとまりと一文ごとの作文を同時に意識しやすくなることが期待される。ただ、学生が書く文章は形式的な段落の構成が整えられていたとしても、下例のように文と文の意味がつながっておらず「段落がまとまらない問題」が散見される。

例：①他にあるのが、映画やレンタルビデオ、ゲームセンターなどの娯楽の増加、ファストフード店やファミリーレストランなどの飲食店の増加である【中心文：娯楽と飲食店】。②前者は結婚しなくても充実した生活を与え、後者は結婚しなくても不便な生活を与える【支持文：飲食店の増加は不便な生活】。③晩婚、とは別かもしれないが、こうした、資本主義社会がもたらした、結婚しなくても良い人生を送れる社会は、結婚しない、あるいは結婚は急いで目指すものではない、結婚できなくても構わないという考え方を育み、結果として晩婚や非婚を助長しているようにも思える【支持文：結婚しなくても良い人生】。④実際に、私の周りにも、結婚に意義を見出せない知り合いは多い【支持文：知り合いの話】。(学習者 ID : j13-2)

例は、JCK 作文コーパスに収録される日本語母語話者の学生の意見文の一部であり、「晩婚化の原因とその展望について」というテーマについて書かれた段落(中心文と支持文による二部構成)である。各文の分析方法については5節5項で詳述する。中心文①で、晩婚化の原因に「娯楽の増加」と「飲食店の増加」の二つの要因があると主張される。

続いて支持文②は、中心文①の理由を説明しようと、「娯楽の増加」が「充実した生活」を、「飲食店の増加」が「不便な生活」をもたらすと説明される。そして、支持文③で別の話題「結婚しなくても良い人生」に移ってしまう。最終的に、支持文④では伝聞「知り合いの話」で段落が締めくくられる。このような論述では、読み手は書き手が主張したい内容とその理由が読みとれず、書き手の言いたいことを理解できない。

このような問題は、段落冒頭の主張を述べる「中心文」を後述する「支持文」で支持することができていない。段落内の内容にズレが生じないようにするには「中心文」と「支持文」の意味を統一させて、「支持文」が「中心文」の理由になるように書き換える必要があるが、それを学生が気づくようにするためには、少なからず教員の介入によって添削や指示が必要になるだろう。こういった課題を解決するには、学生が自身の文章の段落のまとまりに関する問題を評価し、それを推敲によって自ら書き換えられるような方法があるとよい。具体的には、上例のような問題があった際、学生自身が「段落がまとまらない問題」があることを正しく評価して、まとまった文章に書き換えられるよう推敲することが期待される。そうすることで、必ずしも教員が介入しなくても、学生自身でまとまった段落を書けたり、問題を改善するために書き換えたりすることが可能になる。しかしながら、初学者である学生によっては、そのような「段落がまとまらない問題」を自ら推敲して書き換えることが容易なことではないと思われる。では、どういった問題が学生の推敲を難しくさせるのであろうか。また、推敲できない問題にはどのようなものがあるのだろうか。

こうした問題意識から、本稿では、上例のような学生の文章に現れる「段落がまとまらない問題」について、学生自身が推敲する学習する実践によって、その問題を学生が評価して書き換えられるのかということを探り、学生にとって推敲を難しくさせる問題が何かということについて考察することとした。

2. 先行研究

石黒(2020)によれば、「段落」は「意味的には、一つの話題について書かれた内容のまとめり」であるとされる。文章論においては、文章全体だけでなく段落を意味的にまとめることが重要な概念とされる(Halliday & Hasan:1976、市川:1978、庵:1998、石黒:2011)。同じく意見文でも、段落が意味的にまとめられることが重要であると考えられる。そのまとめ方は、パラグラフ・ライティング(以下、PW)における書き方と同様である。すなわち、段落の開始部に中心文を置き、これを支える支持文に続いて段落の終了部に結論文を置く三部構造である(石黒、2020)。また、日本語の場合、段落の開始部に中心文を置き、これを支える支持文によって二部構造を持つこともある(石黒、2020)。

PWでは、段落の冒頭に置かれる「中心文」で示した主張を支持する「支持文」で理由や根拠を積み重ね、場合によっては「結論文」で段落を締めくくることで、意味的にまとまった段落を書くことが求められる。永井(2023)によれば、「中心文」は読み手に内容の見通しを与えるために、そのパラグラフで何を述べるかを一文で述べた文であり、原則としてパラグラフの冒頭に置かれる。また、「支持文」は中心文で提示された内容を展開する文である。そして、「結論文」はパラグラフの終わりを示すと同時に、中心文で述べられた話題を再提示する、またはパラグラフの内容をまとめる文であり、原則としてパラグラフの最後に置かれる。これらの各文の機能は、学生にPWを教える際、作文の条件として提示することができると考えられる。本稿では、これらの条件を各文の問題を分類するために応用することとする。これについては、4節で詳述する。

PWの実践は、学生に「段落」を意味的にまとめるよう書かせる学習として、多くの先行研究でなされている。大島(2011)は、大学学部1

年生30～50名を対象に、ライティングのプロセスを学ばせる実践を行った。履修者への終了後のアンケート調査の結果からは、PWの指導を受けてからの執筆段階で「主張が明瞭に見えてきた」「やりたいテーマが見つかった」などの肯定的な回答が確認されている。一方で、「何を伝えたいかが決まらない」「情報収集をやり直した」「実際に書き進めるとなかなか進まなかった」など、否定的な回答が見られている。また、薄井(2015)では、大学の学びに必要な書く力を育てるための初年次教育科目「日本語の技法」で、PWの技法を受講生に習得させることを目的に、その指導効果を明らかにしている。指導後に提出されたレポートをルーブリック評価で検証した結果、語や文、文相互の関係、段落の構造といった評価項目では高い数値が表れたものの、段落内の「論証」や「引用作法」といった評価項目では低い数値が表れた。とりわけ、「論証」は「主張が明確であり、根拠(経験的事実)と論拠によって支持されている」かどうかを評価するものである。つまり、PWによって一つの段落がまとまるように書けなかった課題が明白になった。両者におけるPWの指導実践は、学生にとって一つの段落をまとめるように書くことに課題があることを示唆している。

学生自身が文章を書き換える行為は、作文教育で「推敲」として扱われる。「推敲」は、「既存の文章の誤謬を正し、客観的な立場から見直して、完成度を高めること」を目的として、文章を書き換えて改良を施すことである(宮城、2022)。深谷(2000)によれば、推敲は「書き手として文章の内容の適切さ」「編集者として構成やレイアウト等の形式をよりよくしようという意識」「読み手として文章を読んだ場合の情報伝達の正確度」という3つの側面から考えることができる。そのため、学生が自ら書いた文章を推敲してよりよい文章をするためには、書き手としてだけでなく、「編集者」にも「読み手」にも立場を変えて文章を練る必要がある。このような推敲には、少なからず技術が必要とされる。宮城(2022)によれば、その技術は、文の内容的欠落や構造、構成に起

因する読み難さ、語句の選択ミスといった「不整」を見直すことである。このような「推敲」の技術を育成しようとする報告がある。水谷・原田・稲田(2024)では、学生にとっての推敲には、「どのような観点で推敲すればよいのかということについて学生自身の中でその枠組みができていないこと」が課題であるとしている。

学生がPWによって一つの段落がまとまるように書けないのであれば、それを推敲によって書けるようになることが期待される。ただし、その推敲には、明確な観点や具体的な方法を提示して、学生が推敲しやすい枠組みを設定する必要がある。このような課題に対して、筆者は意見文をPWの技法によって書かせて、推敲を試みるのが有効であると考え。その理由は、意見文が一つの段落を「中心文」「支持文」「結論文」で構成するため、PWによる具体的な書き方やそのルールを示すことができる。さらに、意見文は前述の通り、レポートや論文と比べて学生にとって執筆しやすい利点がある。学生は、「中心文」で自身が主張したいことを書き、その理由と根拠を「支持文」で説明し、最後の「結論文」で段落を総括する、といった各文の機能を意識して、一つの段落を書くことに集中できると考える。そして、このような指導を経ても、1節で挙げたような段落の問題が現れるのであれば、学生自身が書き表せなかった問題を「中心文」「支持文」「結論文」の各文の機能に照らして、その機能に適した文を書かせるよう指示することで、より明確な推敲をさせることができると考える。

学生が書く文章に「段落がまとめられない問題」があれば、「中心文」「支持文」「結論文」のどの文が推敲によって問題が改善されるのか、その推敲によって各文が改善されないとしたらその要因は何なのか、といったことを探る必要がある。このような問題を明らかにすることは、AW教育における導入段階で、より明確な推敲の指示を示したり、改善に向けた具体的な検討を与えたりといった指導につながると考えられる。こういったことが明らかになれば、学生が自身の作文を評価したり

推敲したりできるようになるだけでなく、AW 教育における作文指導の全般で具体的な指導をするための示唆が得られると考える。

3. 研究目的

本稿では、意見文の「段落がまとまらない問題」を学生が推敲することで、学生自身で改善できる問題と教師の介入による指導が必要な問題を明らかにすることを目的とする。そのために、意見文の段落に焦点を当てて、学生が「段落がまとまらない問題」を書き換える推敲学習を実践する。この実践から、推敲する前（初稿）と推敲した後（第 2 稿）の段落を筆者が評価することで、その推敲によって「段落がまとまらない問題」が改善するものとそうでないものを判定する。その判定によって、学生にとって推敲できる問題と推敲を難しくさせる問題を明らかにする。

4. 段落がまとまらない問題の判定基準と分類

本稿では、学生の「段落がまとまらない問題」を評価するにあたり、永井（2023）をもとに、次の通り「中心文」「支持文」「結論文」の各文の問題を判定する基準を設定した。

「中心文」は、読み手に内容の見通しを与えるために、そのパラグラフで何を述べるかを一文で述べた文であり、原則としてパラグラフの冒頭に置かれることとする。また「支持文」は、中心文で提示された内容を展開する文であることとする。そして、「結論文」は、パラグラフの終わりを示すと同時に、中心文で述べられた話題を再提示する、またはパラグラフの内容をまとめる文であり、原則としてパラグラフの最後に置かれることとする。このような各文の定義をもとに、本稿では、次のように評価基準を設定した（西谷、2024）。

- ①段落の開始部(一文目)の「中心文」による主張が明確であること
- ②「中心文」と複数の「支持文」が一つの話題を述べる内容であること
- ③「支持文」が順序立てて整理されて述べられていること
- ④「結論文」がある場合は、「中心文」と「支持文」の内容をまとめる内容であること

これらの①～④のうち、いずれかでも逸脱するものを「段落がまとまらない問題」として判定する⁽²⁾。問題の分類は、①を逸脱したものは「中心文の主張が不明確なもの」として、②を逸脱したものは「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」として、③を逸脱したものは「支持文の順番が整理されていないもの」として、④を逸脱したものは「結論文で段落をまとめられていないもの」とする。

5. 方法

5.1. 対象とした科目の概要

対象科目は、立正大学法学部法学科で2024年度1年次前期に開講する「アカデミック・ライティングⅠ」という授業である。本授業の目的は、レポート・論文作成の基本的知識を習得することで、文章を作成するために論理的な構成を組むことや論証する力を身につけることである。このために実質的に指導時間が確保されている第2回から第14回までの講義計画のうち、第5回から第7回の3回分(計270分)を使い、意見文作成とその推敲学習を実践した(表1)。具体的には、第5回に教科書(坂東、2016; 井下、2019)を用いて意見文の書き方を解説した。この際、国立国語研究所による「意見文の書き方」⁽³⁾を参照し、PWの解説として、主張(中心文)とそれを支える根拠(支持文)による書き方(伊集院・高野、2020)、意見文の構成(坂東、2016)を参考に、執筆する際の注意点

表 1 アカデミック・ライティングの授業計画

回	講義の目的
2	<ul style="list-style-type: none"> 論文・レポートについて理解する アカデミック・ライティングの意義を理解する
3	<ul style="list-style-type: none"> 学術的文章の構成を理解する
4	<ul style="list-style-type: none"> 先行研究の調査方法と文献調査の方法を理解する 資料の参考のしかたを理解する
5	<ul style="list-style-type: none"> 意見文の書き方を理解し、アウトラインを作成する
6	<ul style="list-style-type: none"> 段落とパラグラフ・ライティングについて理解する 意見文を執筆する
7	<ul style="list-style-type: none"> 意見文を推敲する
8	<ul style="list-style-type: none"> 引用の作法を理解し、引用文献を選定する 参考文献のまとめ方を理解する
9	<ul style="list-style-type: none"> レポートを作成するために構想を練る
10	<ul style="list-style-type: none"> アウトラインを作成する 情報収集のしかたを理解する
11	<ul style="list-style-type: none"> レポートの構成を練る レポートを推敲する
12	<ul style="list-style-type: none"> 図書館およびデータベースを活用して文献調査をする
13	<ul style="list-style-type: none"> 草稿を作成する レポートに合った表現に整える
14	<ul style="list-style-type: none"> 文章を校正し、レポート提出に向けて仕上げる

や執筆要領を説明した。第 6 回に、西谷 (2016; pp.85-93) を参考に、アウトラインの作成のしかたを解説し、学生に草稿を作成する演習を行った。意見文の課題は「晩婚化の原因とその展望について」とし、1200字程度の文字数にするように指示した⁽⁴⁾。その後、学生に初稿を Microsoft Word により作成させて、Microsoft Forms で学生 1 名 1 編ずつデータで提出させた。この初稿は、筆者が段落のまとまりに問題があるか否かを評価するために保存した。第 7 回に、冒頭で初稿を返却した。返却の際、筆者があらかじめ評価し、問題のあった段落の箇所がわかるようにコメントを付した。こうすることによって、学生が問題のある段落を認識して推敲することができる。また同回では、文話題構造分析に

よる推敲方法(5節4項で詳述)について解説したあと、学生に初稿を推敲させて第2稿(完成稿)を書き上げさせた。第2稿の提出方法は初稿と同様とし、翌日までに提出させ、併せて推敲時に記入させた「文話題構造分析シート」(5節4項で詳述)を次回授業時の提出とした。

5.2. 対象データ

対象とするデータは、筆者が担当する授業「アカデミック・ライティングI」を受講する50名(1名につき1編)が書いた意見文50編である。本稿の分析対象者は、受講する対象者のうち初稿で「段落がまとまらない問題」が現れた学生に限定することとする。これは、問題が現れた初稿と第2稿とを比較して分析することで、その推敲による効果を検証するためである。

5.3. 文話題構造分析による推敲方法

段落内の文と文とのつながりを見るための方法に「文話題構造分析(topical structure analysis)」(以下、TSA)というものがある(Lautamatti, 1987)。「TSA」とは、テキスト全体を意識しながら文レベルの話題を決めていき、文章の展開を吟味することで、文話題の意味的關係に焦点を当て、そのテキストがまとまった文章かどうかを明らかにするものである。TSAを用いることの利点は、学生が一文ごとに可視化された命題を、前後の文や段落内を見て意味的にまとまっているか再考しやすいことにある。筆者は経験の見地から、学生が初稿を推敲しようとしても、「どこを見直したらよいか」「どのように改善したらよいか」といったことが検討しにくいと考えた。そこで、自作の文章の一文ごとに命題が明確化される文話題表を用いることで、文と文、段落内の関係を客観的に推敲しやすくなると考えた。

TSAによって段落のまとまりを分析するには、テキストに見られる三つのタイプの文話題を図式化して表に記入することで、文と文の意味

的なつながりや話題どうしのまとまりを見ていく。三つのタイプとは、「並列 (parallel)」「継起 (sequential)」「広範囲での並列 (extended)」であり、これらは文章の展開のしかたを表す。AW 教育における教科書に掲載される一段落の見本文 (大島・池田・大場・加納・高橋・岩田、2014、pp.64-65) を文話題表に記入すると図 1 のようになる。

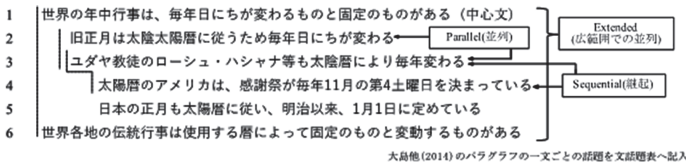


図 1 文話題表への記入例

見本文：1) 世界の年中行事には、使用する暦によって、日にちが毎年変わるものと固定のものがある。2) 中国や、東南アジアの中国系の人々は旧正月を盛大に祝うが、これは太陰太陽暦に従うため、毎年日にちが変わる。3) イスラム諸国のイドル・フィトリ、ユダヤ教徒のローシュ・ハシヤナ等の重要な年中行事も、太陰暦によるため、日にちは毎年変わる。4) 太陽暦を採用するアメリカでは、感謝祭が宗教に関わらず国を挙げて祝う大切な行事であり、これは毎年11月の第4木曜日と決まっている。5) 日本も同様に太陽暦に従い、正月を最も重要な年中行事として、明治以来、1月1日に定めている。6) このように、世界各地の伝統行事の多くは、使用する暦によって日にちが固定のものと変動するものがある。

文話題表に記入する方法について、図 1 とその見本文をもとに説明する。まず、見本文の一文ごとに命題を取り出して話題を決める。そして、その話題を文話題表に書き出していく。「並列」の文はすぐ下に語頭を揃えて記入する (話題 2 と 3)。この「並列」は、同じ話題が連続すると

いうことを意味し、続く二つの文の話題が意味的に同一のものという構造を表す。「継起」の文は文頭を2文字ずらして記入する(話題3と4)。この「継起」は、続く二つ文の話題が意味的に異なるという構造を表す。「広範囲での並列」では、前に書き出した同一話題の下に文頭を揃えて記入する(話題1と6)。前出の文の話題に後出の話題が戻ることで、その二つの話題が意味的に同一のものになる構造を表す。これらの見方については、次節で詳述する。

図1のように文話題表に記入することで原文で示される一文ごとの話題が可視化され、文と文の意味的なつながりを客観的に見て、文脈の流れや段落内のずれといったことを分析して推敲できる。

5.4. 文話題表への記入と見方

学生が文話題表に記入して推敲するためには、記入の方法(前節)、手順、文話題表の見方を理解させる必要がある。これらのことは、第7回の授業で学習させた。

まず、記入の方法と手順を説明した。学生に文話題表を作成させるにあたり、「文話題構造分析シート」(図2)を配布した上で、前述の「並列」「継起」「広範囲での並列」の記入ルールを説明した。次に、「文話題構造分析シート」に記入するよう以下の手順1)～4)を指示した。

- 1) 意見文全体から分析する段落を選定する。「段落」は、改行一字下げの形で(次の改行まで)表される文のまとまりとする。
- 2) 文話題表への記入ルールにしたがって、一文ごとに話題を決めてシートに記入する。話題は命題を取り出し、左側の数字(文の数を表す)に沿って書き出す。
- 3) 前後の話題を見て、文話題表の見方(後述)によって分析する。
- 4) 文話題表の話題とその元になる文を見比べながら、書き換えが必要な文があれば書き換える。

文話題表の見方は、以下の通り説明した。

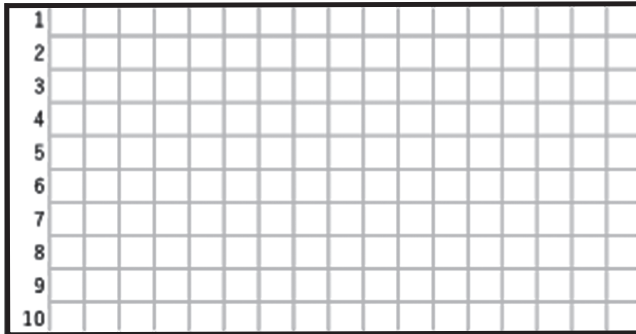


図 2 文話題表記入シート

「並列」では、同じ話題が揃う前後の文を見る。この場合、「同じ話題が並んでいてよいか」「話題が重複していないか」ということを確認する。同じ話題が続くということは、重複した文になっている以外、中心文を指示するために重要な内容と考えられる。そうでなければ書き換えることを検討する必要がある。

「継起」では、そもそも話題が異なることを考慮した上で、「続く文が前の文や先行文脈と意味的につながっているか」を確認する。関係のない話題や意味的につながらない話題が確認できるようであれば、書き換えることを検討する必要がある。

「広範囲での並列」では、最後の一文が結論文であれば、その文で示した話題によって「中心文の主張に関連しているか」「段落内をまとめる一文になっているか」を確認する。そのように書かれていれば、図1のように結論文の話題が中心文の話題に戻り文頭が揃うはずであり、段落内をまとめる文になっているか確認できる。

このように、TSAによる文話題表への記入を利用することで、段落がまとまっているかどうか推敲することができ、そこに問題があるかどうか客観的に分析することができる。推敲では、最終稿が改善されるか否かが大切な観点になる。したがって、この方法による記入や分析の正

誤を問うものではない。文話題表の利用によって、学生自身が入念に推敲することで、完成稿の段落がまとまった文章になることが期待される。

5.5. 推敲の効果を分析する方法

学生による推敲の効果は、あらかじめ推敲前の初稿を筆者が分析して、そこに「段落がまとまらない問題」を特定しておく。本稿では、問題が確認された初稿を対象とする。

まず、筆者が初稿のすべての段落ごとに一文ごとに命題を決めて、文末に書き出す。また、文の機能（「中心文」「支持文」「結論文」）の別を特定して書き出す。次に、筆者が評価基準をもとに、文同士や段落内の意味的なつながりを見て、問題があるか否かを判定する。そして、対象の学生から提出された完成稿が、書き換えられて問題が改善されているか否か、筆者が初稿と比較して分析する。

分析の結果、問題が改善されたものとそうでないものを分別し、前者を推敲による効果があったものとする。そして、それぞれの推敲した結果とその効果を考察する。なお本稿では、推敲の方法として文話題表への記入を促しているため、「文話題表記入シート」を利用して完成稿が書き換えられたかどうか、その提出によって確認する。「文話題表記入シート」が提出され、その記入から確認できる段落が推敲されたことを条件に、改善の効果があったことを認定することとする。初稿で段落に問題が確認されても、「文話題表記入シート」が未提出の場合は、本稿の推敲方法が取られたかどうか判断できないことを理由に対象外する。これらのことをまとめると表2のようになる。

表 2 推敲の結果を評価する方法

	本稿での扱い	段落のまとまりの問題の有無		文話題表への記入	推敲の効果
		初稿の評価	最終稿の評価		
1)	対象	有	無	有	効果あり
2)	対象	有	有 (問題がさらに付加されたものを含む)	有	効果なし
3)	対象外	有	無	無	—
4)	対象外	有	有	無	—

表 2 は、初稿で認められた「段落がまとまらない問題」が、文話題表への記入を推敲に利用することによって、完成稿でどのような結果になるか、その想定から対象と対象外をまとめたものである。1) は、初稿で問題があったが、完成稿で改善されたものである。1) を本稿での推敲の効果があったものとみなす。2) は、初稿の問題が完成稿で改善されなかったものである。2) は本稿での推敲の効果がなかったものとみなす。一方で、3) は完成稿で問題が改善されているが、「文話題表記入シート」の提出がなかったものである。4) は、完成稿で改善されなかったが、「文話題表記入シート」の提出がなかったものである。3) と 4) は、そもそも「文話題表記入シート」の提出がなく、その利用の有無が不明であるために対象から除外する。本稿では、1) と 2) について、その推敲の効果の分析と考察を行う。

6. 推敲の結果

意見文の初稿50編を 5 節 5 項の評価基準によって評価した結果、168 段落中53段落であった (32.5%)。この53段落の「段落がまとまらない問題」には、「中心文の主張が不明確なもの」「支持文が中心文と関係ないもの」「支持文の順番が整理されていないもの」「結論文が中心文と関係ないもの」の 4 種類⁽⁵⁾が見られた。このうち、5 項 5 節 (表 2) の 1) に

該当するものが23例、2)に該当するものが3例、であった。本節では、学生が文話題表への記入による推敲によって、1)と2)に該当した完成稿で改善されたものと改善されなかったものについて、4種類の問題ごとに挙げる。

6.1. 中心文の主張が不明確なもの

一つ目の問題「中心文の主張が不明確なもの」は、「中心文」が主張を述べる文として不明確なために、主張したい内容が読み取れないものである。評価基準①の段落の開始部(一文目)の「中心文」による主張が明確であることから逸脱する。本稿では6段落に見られ、すべての段落で当該問題の改善が見られた。

段落内で主張が述べられる文が不明確だと、読み手は書き手の主張が読み取ることができない。

(1) 推敲前：①一つ目の理由は、近年では独身生活を楽しむ人々が増えており、特に25歳から39歳までの未婚の女性において、未婚である理由に「独身の自由さや気楽さを失いたくない」という回答が目立ちます【中心文：独身生活】。②自己実現や自由な生活を優先し、結婚や家庭形成を後回しにする傾向が広がっています【支持文：結婚や家庭形成の後回し】。

(1)は、主張しようとする内容が読み取れない段落である。(1)の問題は、中心文①で主張する内容が書かれていないことである。

(1)の推敲では図3の通り、書き手が中心文①と支持文②を「並列」として記入していることがわかる。

1 近年、独身生活を楽しまる人々が増えている。
2 自己実現、結婚を後回しにする傾向

図3 学生(9)の文話題表記入シート

(2) 推敲後：①近年では、独身生活を楽しまる人々が増えていることも理由の一つと言えます【中心文：独身生活】。②財務総合政策研究所の調査によると、25歳から39歳までの未婚の女性において、未婚である理由の第2位に「独身の自由さや気楽さを失いたくない」という回答結果が挙げられていました【支持文：独身の自由さや気楽さ】。③結婚や家庭をもつと、沢山の時間やエネルギーを家族や子供に費やす必要があります【支持文：家族や子供】。④しかし、独身であれば、その時間やエネルギーを自分につかえることができ、仕事か趣味、友達との交流にあてることができます【支持文：仕事・趣味・友達】。⑤また、結婚への価値観が変化し、家庭の形成が唯一の幸せであるとは限らず、個人の生活の形や幸福の追求が重要視されるようになってきました【支持文：価値観の変化】。⑥このようなことから、自己実現や自由な生活を優先し、結婚を後回しにする傾向が広がっていると考えます【結論文：結婚を後回し】。

(2)の推敲後の文章を見ると、(1)の推敲前の段落が大幅に書き換えられ、中心文①「独身生活」が明確化された。さらに支持文②～⑤、結論文⑥が追記されていることがわかる。以上のように書き換えられたことで、逸脱していた評価基準の①が充足され、「段落がまとまらない問題」が改善された。

6.2. 中心文との関連が不明確な支持文があるもの

二つ目の問題「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」は、支持文の中に中心文と関連していることが読み取れないものである。評価

基準②「中心文」と複数の「支持文」が一つの話題を述べる内容であることから逸脱する。本稿では10例の段落に見られ、すべての例で当該問題の改善が見られた。

段落の展開部に出てくる支持文が中心文を指示しているか不明確だと、読み手はこれまでと同じ内容なのか、別の内容なのかを探ることになり混乱することになる。

(3) 推敲前：①一つ目の原因として経済面の不安があげられる【中心文：経済面の不安】。②物価の上昇や子供を育てるとなった時の費用、結婚にかかる初期費用など経済面の不安が多く、結婚に踏みだせない若者が増えているのだという【支持文：結婚に踏みだせない若者】。③また近年、大学進学をする人が多く、女性でも大学に通う人が増え、なかでも奨学金を借りている人は約半数をしめるという【支持文：奨学金】。④すでに結婚を考えているパートナーがいたとしても、奨学金返済があり結婚を決めることが遅くなるという人も多くいるのではないだろうか【支持文：奨学金の返済】。⑤また、男女ともに高校卒業後新卒で働く人が減少し、大学、専門学校など進学することにより当然、収入がある社会人になる年齢が遅くなるというのも理由のひとつとしてあるのではないかと考える【支持文：社会人になる年齢】。

(3) は、晩婚化の原因に「経済面の不安」があるという主張を述べようとする段落である。(3) の問題は、支持文⑤(下線部)が中心文①との関連が不明確になっていることである。(1) の推敲では図4の通り、書き手が支持文②～⑤を「継起」として記入していることがわかる。

(4) 推敲後：①一つ目の原因として経済面の不安があげられる【中心文：経済面の不安】。②物価の上昇や子供を育てるとなった時の費用、結婚にかかる初期費用など経済面の不安が多く、結婚に踏みだせない若

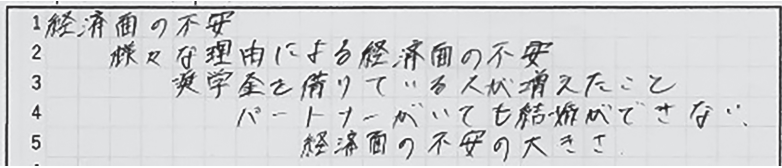


図 4 学生 (1) の文話題表記入シート

者が増えているのだという【支持文：結婚に踏みだせない若者】。③また近年、大学進学をする人が多く、女性でも大学に通う人が増え、なかでも奨学金を借りている人は約半数をしめるという【支持文：奨学金】。④すでに結婚を考えているパートナーがいたとしても、奨学金返済があり結婚を決めることが遅くなるという人も多くいるのではないだろうか【支持文：奨学金の返済】。⑤このようなことから、晩婚化の原因の一つとして経済面の不安が深く関係していると考えられる【結論文：経済面の不安】。

(4) の推敲後の文章を見ると、(3) の推敲前の支持文⑤が削除され、結論文⑤「経済面の不安」(下線部) が追記されていることがわかる。以上のように書き換えられたことで、逸脱していた評価基準の②が充足され、「段落がまとまらない問題」が改善された。

6.3. 支持文の順番が整理されていないもの

三つ目の問題「支持文の順番が整理されていないもの」は、支持文が整理されていないために、並べ替える必要があるものである。評価基準③の「支持文」が順序立てて整理されて述べられていることから逸脱する。本稿では 7 例の段落に見られ、このうち 4 例の段落で当該問題の改善が見られた。一方で、3 例の段落で改善されないものが見られた。

展開部に出てくる支持文の話題が整序されていないと、読み手は段落内の文を行きつ戻りつ読み返すことになり、論証の展開を独自に想定し

なければならない。

(5) 推敲前：①最後に、子育てに不安があることだ【中心文：子育ての不安】。②日本では少子化対策として「児童手当」を給付したり、子育て中の親の不安を軽減するために様々な「子育て支援活動」を行っているが、実際の環境と照らし合わせてみると、まだまだ充実していないのが現状だ【支持文：少子化対策】。③このような社会環境が独身の人の不安につながっている【支持文：独身の人の不安】。④内閣府の調査によると、未婚の人で結婚をしたいという意思がある男女のうち45.3%の人が「子供が欲しい」と考えているようだ【支持文：結婚の意思】。⑤しかし、実際に今の日本の子育てに対するサポートの現状を見ると「子育て」に対して現実的に思えなくなっていることも原因のひとつになっている【支持文：子育てサポートの現状】。

(5) は、晩婚化の原因に「子育ての不安」があるという主張を述べようとする段落である。(5) の問題は、支持文②～⑤の順番が整理されていないために、わかりにくくなっていることである。その要因は、支持文②と⑤が子育て環境の現状について同じ話題であるが、その間に支持文③「独身の人の不安」と④「結婚の意思」を挟んでいるために、異なる話題を行き来しているように感じられるからである。(5) の推敲では図5の通り、書き手が中心文①と支持文②を「継起」、支持文②～⑤を「並列」として記入していることがわかる。

1	子育てに不安があることだ。
2	少子化対策の「児童手当」、子育て支援活動
3	未婚の人の結婚をしたい人のうち45.3%の人が子供が欲しいと考
4	えている人の割合、
5	子育てのサポートの現状

図5 学生(5)の文話題表記シート

(6) 推敲後：①最後に、子育てに不安があることだ【中心文：子育ての不安】。②内閣府の調査によると、未婚の人で結婚をしたいという意思がある男女のうち45.3%の人が「子供が欲しい」と考えているそうだ【支持文：結婚の意思】。③しかし、実際に今の日本の子育てに対するサポートの現状を見ると「子育て」に対して現実的でなくなっている【支持文：子育てサポートの現状】。④日本では少子化対策として「児童手当」を給付したり、子育て中の親の不安を軽減するために様々な「子育て支援活動」を行ったりしている【支持文：少子化対策】。⑤だが、実際の環境と照らし合わせてみると、まだまだ充実していないのが現状だ【支持文：充実していない現状】。⑥このようなことがあり、「子育て」に対する不安につながっていることが原因の一つにあると考える【結論文：子育ての不安】。

(6) の推敲後の文章を見ると、(5) の推敲前の支持文②～⑤の順番が並べ替えられ、整理されたことが分かる。さらに結論文⑥「子育ての不安」が追記されていることがわかる。以上のように書き換えられたことで、逸脱していた評価基準の③が充足され、「段落がまとまらない問題」が改善された。

(7) は、本稿の実践において、推敲の結果が現れなかった例である。

(7) 推敲前：①私は晩婚化の理由は昔と今の価値観の違いによるところが大きいのではないかと考えた【中心文：価値観の違い】。②その理由は私の祖父が 5 年ほど前にニュースを見ていた時に昔は結婚するのが当たり前だと思っていた、と言っているのを思い出したからだ【支持文：祖父の話】。③そこで調べてみると1990年頃を境に必ずしも結婚する必要はないと考える人の割合が増えてきている事が分かった【支持文：結婚する必要はないと考える人】。④そこで私は最近の日本では結婚のことだけでなく、様々な点で個人の自由という言葉が広がっている

からだと考える【支持文：個人の自由】。⑤そういった中で結婚についても個人の自由だから、結婚してもしなくてもどちらでも良いとそもそも考える若者が増えたのだと考える【支持文：若者の考え】。⑥厚生労働省のデータでもそのような考え方について賛成だという人の割合が若者を中心に増加してきている【支持文：自由と考える若者】。⑦そうだけでなくも社会で個人の自由という潮流が生まれている以上、昔のように半ば強制的に結婚を進めてくるような人間も減ったのだと考えた【支持文：結婚する人の減少】。

(7)は、晩婚化の原因に「価値観の違い」があるという主張を述べようとする段落である。(7)の問題は、支持文②～⑥が執筆の経緯や調査を説明した文になっていて、支持文の順番や調査の情報が整理されていないことである。(7)の推敲では図6の通り、書き手が中心文①と支持文②を「継起」、支持文②～④を「並列」、支持文④と⑤を「継起」、中心文①と支持文⑦を「広範囲での並列」として記入していることがわかる。なお、書き手は支持文⑦を「結論文」と認識しているようであるが、その一文は段落を総括しているものではなく、また中心文①を再提示してもいないことから、筆者が「指示文」と判断した。

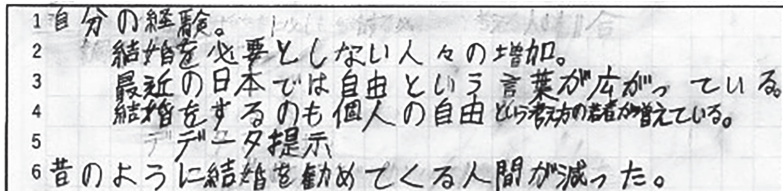


図6 学生(7)の文話題表記入シート

(7)の推敲後の文章は推敲前と変わらず、追記や削除、支持文の並べ替えなどの書き換えが見られなかった。そのため、掲載を省略した。

(7)は、特に支持文を整理するよう書き換える必要があったにもかかわらず

ならず、書き換えることが行われず、「段落がまとまらない問題」が改善されなかった。

6.4. 結論文で段落がまとめられていないもの

四つ目の問題「結論文で段落がまとめられていないもの」は、中心文や支持文で述べられる先行文脈まで内容を結論文で総括できていないものである。評価基準④の結論文がある場合は、中心文と支持文の内容をまとめる内容であることから逸脱する。本稿では 3 例の段落に見られ、すべての段落で当該問題の改善が見られた。

最後部に出てくる結論文が段落の内容を総括できていないと、読み手はその一文が段落内とどのように関係しているのか探ることになり、段落内を読み返してしまい、結果として段落がまとまっていないと感じてしまう。

(8) 推敲前：①次に、「社会格差が男女間でなくなった」です【中心文：男女の格差】。②かつては男性が仕事、女性は家に入って家事をするという考え方が多く強かったですが、昨今は男女雇用機会均等法によって働く女性が増えて、賃金も上昇しています【支持文：働く女性】。③これによって結婚するというよりも上に書いた「仕事に時間を費やしたい」とする方が増えたのも一個の原因であると考えられます【結論文：仕事に時間を費やす人】。

(8) は、晩婚化の原因に「男女の格差」がなくなったことを主張しようとして述べる段落である。(8) の問題は、結論文③(下線部)が中心文と関係なく、段落を総括できていないことである。(8) の推敲では図 7 の通り、書き手が中心文①と支持文②を「並列」、支持文②と③を「継起」として記入していることがわかる。

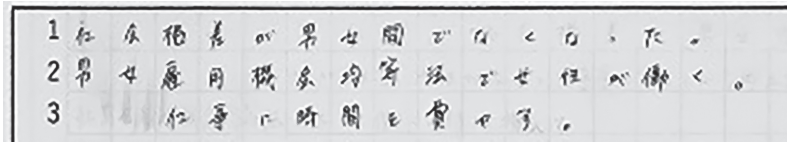


図7 学生(3)の文話題表記入シート

(9) 推敲後：①二番目の理由は、「社会格差が男女間でなくなった」ということです【中心文：男女の格差】。②かつては、男性が仕事をし、女性は家事を行うという考え方が強く浸透していました【支持文：仕事と家事】。③まさしく男尊女卑というものです【支持文：男尊女卑】。④しかし、男女雇用機会均等法が定められたことで、女性が働けるようになりました【支持文：働く女性】。⑤最近では女性の賃金も上昇し、社会の中においてほぼ男性と同じくらいの地位になっています【支持文：男女の格差是正】。⑥このような社会的な格差における男女間の変化が起きたことが一つの原因であると考えます【結論文：男女格差の変化】。

(9) の推敲後の文章を見ると、(8) の推敲前の結論文③が結論文⑥(下線部)に書き換えられ、段落がまとめられていることが分かる。さらに支持文③～⑤が追記されている。以上のように書き換えられたことで、逸脱していた評価基準の④が充足され、「段落がまとまらない問題」が改善された。

7. 考察

本項では、学生の「段落がまとまらない問題」が文話題表への記入によって推敲した結果、それらが改善されたかどうか、その効果について考察する。

一つ目の問題「中心文の主張が不明確なもの」は、本稿が挙例したも

のでは、中心文による主張が明確化された。この他の 5 例も同様の結果であった。中には、支持文・結論文が追記され、段落が大幅に書き換えられていたものもあった。学生は、段落で中心文を書く際、主張を明確化できていないことが考えられる。その問題は、文話題表への記入による推敲で明確に書き換えることが確認できた。このような推敲の段階を経たことで、学生が中心文の不明確さに気づいて書き換えることにつながれたと考える。

二つ目の問題「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」は、本稿が挙例したものでは推敲前の支持文が削除され改善されていた。このほかの 9 例も同様の結果であった。中には、結論文が追記されていたものもあった。学生は、支持文を書き連ねる際に、その支持文が中心文を支持しているかどうか見失ってしまい、別の内容を書いてしまうことがあると思われる。その問題は、文話題表への記入による推敲で読み返すことができ、不明確な支持文の改善につながったと確認できた。こういった支持文の齟齬を見直すために、中心文を支持できてきていない支持文の見直しにつながれたと考える。

三つ目の問題「支持文の順番が整理されていないもの」は、本稿が挙例したものでは、推敲前の支持文の順番が並べ替えられ、段落内が整理されていた。このほかの 3 例も同様の結果であった。学生は、段落を書くことに集中していると、書き連ねている支持文が整序されているかどうかを確認することが難しいと考えられる。その問題は、文話題表への記入による推敲で、支持文を整理することができ、支持文を並べ替えることにつながったと確認できた。こういった支持文の未整理の問題を改善するため、文話題表への記入による推敲で支持文を整序することにつながれたと考える。一方で、この問題では推敲の結果が現れなかった例が、挙例したものを含め 3 例に見られた。それらの段落では、推敲を経てもその前と後の文章が変わらず、書き換えによる改善が見られなかった。この結果からは、学生が連ねられた複数の支持文を並べ替えた

り整序したりといった推敲をするのが難しいと考えられる。支持文の一文を書き換えることは、意図したことがその一文に示されているかということを考えれば可能であるが、支持文を整序することは、書かれた文章を読み手の立場で見て、「どのように並べ替えたらいいか」「どのように支持文を書き連ねると伝わるか」といった論理性や伝達性を客観的に評価する観点が求められる。こうしたことは、本稿の推敲方法の課題と考えられる。

四つ目の問題「結論文で段落がまとめられていないもの」は、本稿が挙例したものでは、結論文が書き換えられ、その一文によって段落をまとめることができていた。このほかの2例も同様の結果であった。その問題は、文話題表への記入による推敲で、結論文を見直すことができ、その文を書き換えることにつながったと確認できた。学生は、結論文によって段落をまとめるように作文することに課題を残していることが考えられる。こういった改善のために、文話題表への記入による推敲で書かれた結論文を見返して、書き換えることにつなげられたと考えられる。

8. まとめ

本稿では、PWによって書かれた意見文の「段落がまとまらない問題」を学生自身に推敲させることで、学生が改善できる問題と教師の介入による指導が必要な問題を明らかにすることを目的に、文話題表への記入による推敲の実践をもとに、問題の改善結果から推敲の効果を検討した。

学生が改善できる問題については、「中心文の主張が不明確なもの」「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」「結論文で段落がまとめられていないもの」が確認され、「中心文」「支持文」「結論文」のいずれかが段落内で支障をきたしていることがわかった。これらの問題を特定して推敲するために、文話題表への記入という方法を実践した結果、

いずれの問題も改善された。学生は、本稿では、この 3 つの問題について、文話題表への記入による推敲の効果があったことが成果である。文話題表への記入は、「中心文」「支持文」「結論文」といった各文が、段落内のまとまりを欠くような何らかの支障をきたしている場合に、その要因を明らかにすることに役立てられることがわかった。それによって、特定された問題を削除したり書き換えたりすることにつながられる。また、教師の介入による指導が必要な問題については、「支持文の順番が整理されていないもの」が確認され、段落内の複数の支持文を対象として、それを並べ替えたり整序したりできなかったことがわかった。この問題を特定して推敲するために、文話題表への記入という方法を実践したが、一部改善されない例があり、その推敲の效果に課題を残した。単に文を書き換える作業にとどまらず、複数の支持文や段落内を客観的に見て、それらが整序されるには、本稿の文話題表への記入という推敲方法で改善されないことがあるとわかった。このことは、学生にとって支持文を並べ替えたり整序したりする推敲が難しく、教師の介入が必要であることを示唆させるものである。

以上のことから、学生の「段落がまとまらない問題」は、文話題表への記入を利用した推敲によって「中心文の主張が不明確なもの」「中心文との関連が不明確な支持文があるもの」「結論文で段落がまとめられていないもの」が、学生自らが改善できるものであると明らかになった。一方で「支持文の順番が整理されていないもの」が学生にとって推敲を難しくさせるものであり、教師の介入による指導を必要とすることを実証的に示すことができたことが、本稿の成果である。

今後の研究課題としては、「段落がまとまらない問題」に対して教師が指導する場合、本稿が示した 4 つの問題の分類とその推敲例を示したことによって、同じような問題が現れた場合に明確な指示を与えることができ推敲を補助しやすくなると思われる。本稿の成果を応用して、とりわけ「支持文の順番が整理されていないもの」のような問題に対して、

教師が指導の場面でどうすれば段落内を整理させたり整序させたりすることができるのか、ということを経験で検討していきたい。これらの課題に継続して取り組みながら、AW 教育において学生が自身で推敲できない点を明確にし、それに対して教師の指導する部分とその内容を明らかにできるように検討していきたい。

注

- (1) JCK 作文コーパスは日本語母語話者 (Japanese)、中国語母語話者 (Chinese)、韓国語母語話者 (Korean) による日本語作文 (説明文「自分の故郷について」、意見文「晩婚化の原因とその展望について」、歴史文「自分の趣味 (昔から続けていること) について)」という 3 つのタイプの作文が収録される。意見文は 2000 字を条件に書かれたものである。
- (2) 西谷 (2024) の「パラグラフがまとまらない問題」をもとに、同様の評価方法で判定したものである。
- (3) <https://www2.ninjal.ac.jp/tanken/2022/ikenbun/>
- (4) この課題は「JCK 作文コーパス」という、日本語母語話者、中国語母語話者、韓国語母語話者による日本語作文を収録しているコーパスをもとに設定したものである。
- (5) 4 種類の問題の分類は、西谷 (2024) を援用した。

参考文献

- 坂東実子 (2016) 『大学生のための文章表現』国書刊行会。
- 深谷優子 (2000) 「適切な文章にするための推敲とは」東京大学大学院教育学研究紀要、39、313-317。
- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版。
- 伊集院郁子・高野愛子 (2020) 『日本語を学ぶ人のためのアカデミック・ライティング講座』アスク出版。
- 井下千以子 (2019) 『思考を鍛えるレポート・論文作成法 第 3 版』慶應義塾大学出版会。
- 庵 功雄 (1998) 「テキスト言語学の理論的枠組みに関する一考察」一橋大学留学生センター紀要、1、33-52。
- 石黒 圭 (2011) 「文章理解における一貫性の把握について」一橋大学国際教育センター紀要 2、3-11。
- 石黒 圭 (2020) 『段落論—日本語の「わかりやすさ」の決め手』光文社。
- Lautamatti, Liisa (1987) "Observations on the Development of the Topic in Sim-

- plified Discourse,” In Connor, U. and R.B. Kaplan, eds. *Writing Across Languages: Analysis of L2 Text*. 87-114, MA: Addison-Wesley.
- M.A.K. ハリデイ、ルカイヤ・ハサン (1976) 『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性』安藤貞雄・多田保行・永田龍男・高口圭軒・中川 憲共訳、ひつじ書房。
- 宮城 信 (2022) 「作文推敲の観点と困難さ：作文の書き換え調査から」富山大学国語教育、**46**、10-24.
- 水谷いつみ・原田大樹・稲田公子 (2024) 「初年次教育における推敲力の育成—自己・他者の推敲の観点を中心に—」福岡女学院大学紀要、**25**、73-78.
- 文部科学省高等教育局 (2021) 「令和元年度の大学における教育内容等の改革状況について」、https://www.mext.go.jp/content/20211104-mxt_daigaku03-000018152_1.pdf
- 西谷尚徳 (2016) 『社会で活躍するためのロジカル・ライティング—自己分析と文章力の養成』弘文堂。
- 西谷尚徳 (2024) 「初年次学生の意見文に見られるパラグラフがまとまらない問題」国際日本学研究論集、**20**、1-18.
- 大島弥生 (2011) 「大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス」言語文化と日本語教育、**33**、57-64.
- 大島弥生・池田玲子・大場理恵子・加納なおみ・高橋淑郎・岩田夏穂 (2014) 『ピアで学ぶ大学生の日本語表現—プロセス重視のレポート作成 [第 2 版]』ひつじ書房。
- 薄井道正 (2015) 「初年次アカデミック・ライティング科目における指導法とその効果—パラグラフ・ライティングと論証を柱に—」京都大学高等教育研究、**21**、15-25.

参考資料

- JCK 作文コーパス、「テキストの結束性を重視した母語別作文コーパスの作成と分析」(2013年度～2015年度)、基盤研究 (C)、(研究課題番号：25370577、研究代表者：金井勇人) <http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/>